山梨の旧道を訪ねて

一道一会

小菅村/青梅街道（小菅道）

甲州裏街道ともいわれた青梅街道。今回は小菅村余沢から石丸峠までの小菅道を歩いた。

その昔、江戸と甲府を結ぶ街道は二つあった。ひとつは甲州街道、もうひとつは甲州裏街道といわれた青梅街道である。青梅街道の歴史は甲州街道よりも古く、甲州街道が開かれた後も江戸から甲府までの道のりが二里ほど近かったため、多くの旅人に利用された道であった。

今回は、小菅村余沢地区で国道139号を左に分かれるところから歩くことにした。出発点としたところには、国道に背を向け富士講（富士山を信仰する人々）の供養塔がある。富士山に詣でるため何人の旅人がこの道を行き来したのであろうか。富士講により建てられた供養塔は、今もなお富士山の方向を向いて立っている。

小菅川を渡り道が上りにかかると、口留番所跡がある。今は、解説板があるのみで当時をしのばせる痕跡はないが、武田の時代からこの地が国を守る要所であったことがうかがえる。

しばらく歩き、白沢橋を渡ったところで二手に分かれた道を右に上って行く。林道のような道を上り切ると、再び国道139号に合流し、左に下ると「馬頭観音」「蚕供養塔」が、街道の面影を伝えるように立っていた。

石丸峠への登山道入口がある田元地区は、国道を歩き始めて1.5㎞ほどのところにあった。登山道入口は、民家の庭先のようなところにあり「牛ノ寝方面登山口」と書かれた標識が置かれている。良く整備された入口からこう配のややきつい山道を息を切らして1時間ほど歩くとモロクボ平で川久保地区からの道と合流する。ここからは、こう配も緩やかとなり広葉樹がつくる緑のトンネルをしばらく歩いたところに、気を付けないと見落としてしまいそうな馬頭観音があ

田元地区の「牛ノ寝方面登山口」付近

る。高さ50㎝ほどの馬頭観音の薄れた字が、この道が古くから利用されていたことを物語っている。

道はさらにこう配を緩め、登山口から2時間ほどで棚倉に到着する。

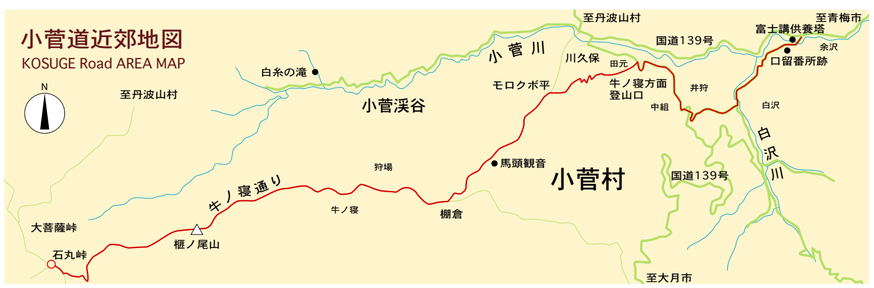
ここからしばらくは多少の上り下りはあるものの、牛ノ寝通りの名のとおり、牛の背を歩くような穏やかな尾根道が続く。展望はきかないが、道を覆う広葉樹から漏れる優しい陽が道にさまざまな影を落とし、歩くことを飽きさせない。

棚倉から1時間ほど歩いた榧（かや）ノ尾山頂で展望が開ける。ここから石丸峠までの本格的な上りに備えて、しばし休を休め、再び峠を目指す。

昔の人は本当に荷を背負ってこの道を歩いたのだろうか？　そんなことを考えさせられるようなきついこう配を上りつめると突然視界が開ける。田元の登山口からおよそ4時間30分。石丸峠である。

空の青と一面の笹の緑がそう快な景色を作り、正面下方には上日川ダム、左に小金沢山、右に大菩薩峠に向かう熊沢山が見え、緑の笹の中を一筋の道がのびていく光景は、この峠からまた何かが始まるような、期待を抱かせてくれる。

その昔、大菩薩峠は丹波山村から上る峠を上峠といい、小菅村から上りこの石丸峠に出る峠を下峠といったそうである。柳沢峠を越える現在の青梅街道が明治時代に開通するまでは、この道を通って小菅村からはコンニャクやワサビが、塩山方面からは米や塩などの貴重な生活物資が運ばれた。

ひとつの時代の役割を終えた道は静かな登山道に姿を変えていた。登山客でにぎわう大菩薩峠は、ここからわずか30分のところにある。

上／街道の面影をかすかに残す馬頭観音　中／広葉樹が作り出す木漏れ日の道　下／塩山方面から石丸峠へと続く道